

「12使徒の選抜 - イスカリオテのユダ-」

§ 053 マコ 3 : 13~19、ルカ 6 : 12~16

1. はじめに

(1) 12使徒のメッセージの最後

(2) これまでに 11 人取り上げた。

- ①ペテロ：キーマン
- ②アンデレ：紹介者
- ③ヤコブ：天国への一番槍
- ④ヨハネ：主が愛された弟子
- ⑤ピリポ：哲学者
- ⑥ナタナエル（バルトロマイ）：イスラエルの型
- ⑦マタイ：神からの贈り物
- ⑧トマス：懐疑論者
- ⑨アルパヨの子ヤコブ：隠れた偉人
- ⑩熱心党员シモン：転向者
- ⑪別名タダイのユダ：ライオンハート

(3) 今回は、第3組の最後に出て来るイスカリオテのユダを取り上げる。

- ①ユダがなぜイエスを裏切ったのかは、謎である。
- ②そのため、さまざまな意見が出てくる。

<12使徒の歌（ルカ 6 : 14~16）>

- 1. イエスの使徒たち 12 人、彼らは全員 20 代、
1 組 4 人で活動し、御国の福音伝えます。
- 2. ペテロが最初の長（おさ）となり、弟アンデレそこに付き、
ヤコブとヨハネの兄弟も、御国のために仕えます。
- 3. ピリポの組の者たちは、バルトロ、別名ナタナエル、
マタイ、もとは取税人、トマス、あだ名がデドモ（双子）です。
- 4. ヤコブの父はアルパヨで、シモンの前歴熱心党、
別名タダイのユダがいて、裏切り者のユダ最後。

2. アウトライン

- (1) 概略
- (2) 裏切りに至るステップ
- (3) 裏切り行為
- (4) 裏切りの結果

3. 結論：イスカリオテのユダの人生から、教訓を学ぶ。

このメッセージは、イスカリオテのユダの人生から教訓を学ぼうとするものである。

I. 概略

1. 呼び名

「イエスはイスカリオテ・シモンの子ユダのことを言われたのであった。このユダは十二弟子のひとりであったが、イエスを売ろうとしていた」(ヨハ6:71)

(1) イスカリオテ・シモンの子

- ①ユダの父親の名は、イスカリオテ・シモンである。
- ②「イスカリオテ」とは、「カリオテ出身の人」という意味である。
- ③彼の父親も彼自身も、カリオテ出身である。
- ④それで、イスカリオテ・ユダという。

(2) カリオテ

- ①ユダ(イスラエル南部)の町である。
- ②ヨシ15:25に、この町の名が登場する。

(3) 以上のことから、イスカリオテのユダだけがガリラヤ人でなかったことが分かる。

- ①彼は、都会人である。
- ②一般的に、ユダの住民はガリラヤ人たちを見下していた。
- ③ユダにも、そのような傾向があったと思われる。

2. イエスによる選抜

(1) イエスは、ユダの内に使徒としての可能性を見たはずである。

- ①でなければ、彼を選ぶことはなかったであろう。

(2) ユダは、使徒集団の中で重要な役割を果たしていた。

- ①彼は、金入れ(財布)を預かっていた(ヨハ12:6、13:29)。
- ②つまり、彼には管理能力があったのである。
- ③集団の財布を委ねられるのは、人格的に最も信頼されている者である。

(3) イスカリオテのユダは、12使徒のリストの中では常に最後に出て来る。

II. 裏切りに至るステップ

1. はじめに

- (1) 使徒の召命から裏切りに至るまでの情報は、ヨハネの福音書だけに出て来る。
- (2) イスカリオテのユダは、最初から邪悪な性格を宿していたと思われる。
 - ①徐々にその邪悪な性格が明らかになっていく。
 - ②イエスのことばは、時とともにユダの性格を鮮明に指摘するようになっていく。

2. 命のパンのメッセージが語られた場面

(1) ヨハ6:35

「イエスは言われた。『わたしがいのちのパンです。わたしに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者はどんなときにも、決して渴くことはありません』」

- ①5千人のパンの奇跡の後、カペナウムで語られたメッセージである。
- ②「天から下って来た」とは、自分は人間以上の存在であるという宣言である。
- ③ユダヤ人たちは、イエスをヨセフの子としてしか認識していなかった。
- ④彼らは、イエスの処女降誕に関しても、イエスの受肉に関しても無知であった。

(2) ヨハ6:41~42

「ユダヤ人たちは、イエスが『わたしは天から下って来たパンである』と言われたので、イエスについてつぶやいた。彼らは言った。『あれはヨセフの子で、われわれはその父も母も知っている、そのイエスではないか。どうしていま彼は「わたしは天から下って来た」と言うのか』」

- ①このメッセージの後で、弟子たちのうちの多くの者が離れ去った(ヨハ6:66)。
- ②さまざまな理由が考えられる。
 - *イエスが、彼らの期待するメシア像とは異なる方向に歩んでいるから。
 - *イエスのメッセージ(悔い改めと信仰)が気に入らなかったから。
 - *イエスの超自然的な自己宣言が信じられなかったから。

(3) ヨハ6:64

『しかし、あなたがたのうちには信じない者がいます。』——イエスは初めから、信じない者がだれであるか、裏切る者がだれであるかを、知っておられたのである——」

- ①イエスは、公生涯の最初から弟子の中で信じない者が出ることを知っていた。
- ②また、裏切り者がだれであるかを知っていた。
- ③ペテロは、イエスへの信頼をただちに告白した。

(4) ヨハ6:70~71

「イエスは彼らに答えられた。『わたしがあなたがた十二人を選んだのではありませんか。しかしそのうちのひとりには悪魔です』。イエスはイスカリオテ・シモンの子ユダのことを言われたのであった。このユダは十二弟子のひとりであったが、イエスを売ろうとしていた」

- ①イエスは、12人の中のひとりには悪魔だと言われた。
- ②悪魔の手先として働いているという意味であろう。
- ③ここでもイエスは、イスカリオテのユダの名を上げてはいない。
- ④ヨハネが説明を付け加えている。
- ⑤この段階で、ユダの心はすでにイエスから離れていた。
- ⑥彼が依然として使徒集団に留まるのは、別の動機から。
- ⑦彼は、忠実な使徒の仮面をかぶって活動を継続する。

3. マリアによる油注ぎの場面

(1) ヨハ12:3~5

「マリヤは、非常に高価な、純粋なナルドの香油三百グラムを取って、イエスの足に塗り、彼女の髪の毛でイエスの足をぬぐった。家は香油のかおりでいっぱいになった。ところが、弟子のひとりで、イエスを裏切ろうとしているイスカリオテ・ユダが言った。『なぜ、この香油を三百デナリに売って、貧しい人々に施さなかったのか』」

- ①マリアは、イエスの埋葬の準備をしていた。
- ②ユダは、その気前の良い行いに文句を言った。
- ③「なぜ、貧しい人々に施さなかったのか」とは、正論である。
- ④マタ26:8では、「弟子たちは憤慨して言った」となっている。
- ⑤マコ14:4では、「何人かの者が憤慨して互いに言った」となっている。

(2) ヨハ12:6

「しかしこう言ったのは、彼が貧しい人々のことを心に掛けていたからではなく、彼は盗人であって、金入れを預かっていたが、その中に収められたものを、いつも盗ん

でいたからである」

- ①これもまた、ヨハネによる注釈である。
- ②使徒たち全員が、同じ財布に金を入れた。
- ③それは、貧しい人々のためにも用いられた。
- ④ユダは、盗人である。また発覚していないが。
- ⑤ユダは、共通の財布から、少額を習慣的にかすめていた。

III. 裏切り行為

1. 姿を消す

(1) ユダは、収入源が断たれる時が近いことを認識した。

- ①イエスは、自らの死について語った。
- ②イエスは、悪の力が働いていることを知っていた。
- ③使徒集団から去る時が来ている。

(2) マタ 26 : 14~16

「そのとき、十二弟子のひとりで、イスカリオテ・ユダという者が、祭司長たちのところへ行って、こう言った。『彼をあなたがたに売るとしたら、いったいいくらくれますか』。すると、彼らは銀貨三十枚を彼に支払った。そのときから、彼はイエスを引き渡す機会をねらっていた」

- ①単にイエスの居所を教えるだけでなく、裁判で証人になることを提案した。
- ②銀貨30枚は奴隷を贖うための値段である(出21:32)。
- ③その価値を正確に言い当てるのは困難である。
 - * どの銀貨か明確には書かれていない。
 - * 購買力は時代によって変化する。
 - * ユダにとっては取引に値する額である。
- ④両者の間に契約が結ばれ、その場で報奨金の支払いが行われた。

(3) ルカ 22 : 3

「さて、十二弟子のひとりで、イスカリオテと呼ばれるユダに、サタンが入った」

- ①ユダは自分の心にサタンを招き入れたと言える。

2. 姿を現す

(1) ヨハ 13 : 2~4

「夕食の間のことであった。悪魔はすでにシモンの子イスカリオテ・ユダの心に、イ

エスを売ろうとする思いを入れていたが、イエスは、父が万物を自分の手に渡されたことと、ご自分が神から出て神に行くことを知られ、夕食の席から立ち上がって、上着を脱ぎ、手ぬぐいを取って腰にまとわれた」

- ①ユダが最後の晚餐(過越の食事)の席に同席している。
- ②彼は悪魔(サタン)の支配下にあった。
- ③イエスは、弟子たちの足を洗われた。

(2) ヨハ13:10~11

「イエスは彼に言われた。『水浴した者は、足以外は洗う必要がありません。全身きよいのです。あなたがたはきよいのですが、みながそうではありません』。イエスはご自分を裏切る者を知っておられた。それで、『みながきよいのではない』と言われたのである」

- ①イエスは、ユダが自分を裏切ることを知っておられた。
- ②ヨハネは、そのことを解説している。

(3) ヨハ13:21

「イエスは、これらのことを話されたとき、霊の激動を感じ、あかしして言われた。『まことに、まことに、あなたがたに告げます。あなたがたのうちのひとりが、わたしを裏切ります』」

- ①イエスは、この時点でも、ユダという名を出していない。
- ②ペテロがヨハネに指示を出し、ヨハネがイエスに、裏切り者は誰かと聞いた。

(4) ヨハ13:26~27

「イエスは答えられた。『それはわたしがパン切れを浸して与える者です』。それからイエスは、パン切れを浸し、取って、イスカリオテ・シモンの子ユダにお与えになった。彼がパン切れを受けると、そのとき、サタンが彼に入った。そこで、イエスは彼に言われた。『あなたがしようとしていることを、今すぐしなさい』」

- ①イエスの回答は、ヨハネだけが聞くことができた。
- ②パン切れを与えるのは、主人のもてなしの行為である。友情のしるし。
- ③友情のしるしが、裏切り者を特定する方法となった。
- ④サタンは、ついにユダを完全に支配するようになった。
- ⑤しかし、ヨハネでさえもイエスのことばの意味を理解できなかった。

3. 再度姿を消す

(1) ヨハ16:30

「ユダは、パン切れを受けるとすぐ、外に出て行った。すでに夜であった」

- ①イエスのユダに対することばは、神の計画を予定通りに進める力となった。
 - *イエスは、過越の祭りの間に十字架にかかる必要があった。
 - *祭司長たちは、祭りの後でイエスを殺そうとしていた。
- ②ユダは、新約のしるしとしてのパンとぶどう酒を受ける前に、そこを去った。
- ③ヨハネの福音書の中で、最も暗い箇所である。

4. 再度姿を現す

(1) ヨハ 18 : 2~3

「ところで、イエスを裏切ろうとしていたユダもその場所を知っていた。イエスがたびたび弟子たちとそこで会合されたからである。そこで、ユダは一隊の兵士と、祭司長、パリサイ人たちから送られた役人たちを引き連れて、ともしびとたいまつと武器を持って、そこに来た」

- ①イエスは、ゲツセマネの園で祈っておられた。
- ②そこに裏切り者のユダがやって来た。
 - *およそ 600 人のローマ兵
 - *祭司長、パリサイ人たちから派遣された役人たち
 - *たいまつと武器
- ③ユダは、イエスに口づけした (マタ 26 : 49)。

IV. 裏切りの結果

1. 後悔

(1) マタ 27 : 3~4

「そのとき、イエスを売ったユダは、イエスが罪に定められたのを知って後悔し、銀貨三十枚を、祭司長、長老たちに返して、『私は罪を犯した。罪のない人の血を売ったりして』と言った。しかし、彼らは、『私たちの知ったことか。自分で始末することだ』と言った」

- ①ユダは自責の念にかられたが、これは救いに至る悔い改めではない。
- ②彼は、銀貨 30 枚を返した。
- ③しかし、祭司長、長老たちは、取り合わなかった。
- ④彼らは、罪の道では友人であったが、義の道では他人同士である。

2. 自殺

(1) マタ 27 : 5~7

「それで、彼は銀貨を神殿に投げ込んで立ち去った。そして、外に出て行って、首をつった。祭司長たちは銀貨を取って、『これを神殿の金庫に入れるのはよくない。血の代価だから』と言った。彼らは相談して、その金で陶器師の畑を買い、旅人たちの墓地にした。それで、その畑は、今でも血の畑と呼ばれている」

- ①ユダは、銀貨を神殿に投げ込んで、別の場所で首をつって死んだ。
- ②自殺は、ユダヤ教では最悪の行為である。
- ③マタイによる皮肉
 - *祭司長たちは、大切なことは無視して、小さなことにこだわっている。
 - *イエスを殺すのは平気、血の代価を神殿の金庫に入れるのには抵抗がある。
- ④彼らは、陶器師の畑を買い、旅人たちの墓地にした。

結論：主の愛を拒み続けた人

1. 誤った見解（すべてユダの性格を上に取り上げるものである）

- (1) ユダは、愛国者であった。
 - ①イエスを、ユダヤ人の伝統を破壊する敵と見なした。
 - ②そのため、イエスを殺すことに手を貸した。
 - ③しかし、祭司長たちはユダを拒否したので、この説は成り立たない。
- (2) ユダは、イエスのメシアとしての啓示を早めるために、イエスを売り渡した。
 - ①ユダは、政治的メシア像を持っていた。
 - ②イエスは、いつまで経ってもその方向に動かないので、ユダの方から動いた。
 - ③ユダが自殺したのは、イエスに失望したからである。
 - ④しかし、イエスのユダを叱責する厳しいことばは、この説を否定している。
- (3) ユダは、裏切り者になるように定められていた。
 - ①神の計画があるのだから、こうなるのは当然である。
 - ②ユダの裏切りがなかったら、イエスは十字架にかかっていなかった。
 - ③これは、予定論の極端な適用である。
 - ④神の主権と人間の自由意志の問題は、簡単に解決できるようなものではない。
 - ⑤神の主権を認めると同時に、ユダの責任を問わなければならない。

2. 正しい見解（ユダには責任がある）

- (1) ユダの罪の進展に注目すべきである。
 - ①ユダには、最初から、能力とともに心の汚れ（盗人の性質）があった。

- ②彼は、共通の財布から少しずつ盗み始めた。
- ③彼は、イエスのことばを聞き、地上的成功の見込みがないことを感じ始めた。
 - *命のパンのメッセージ
- ④彼は、もっと盗み始めた。
- ⑤彼は、イエスから心が離れていても、それを隠して使徒集団の中にとどまった。
- ⑥彼は、イエスの叱責のことばを聞いて、サタンを心に迎えた。
 - *ベタニヤでの油注ぎ
- ⑦彼は、銀貨30枚でイエスを売り渡す約束をした。
- ⑧彼は、「今しなさい」というイエスのことばを聞いて、裏切りを実行に移した。
 - *最後の晚餐
- ⑨彼は、逮捕する者たちをゲツセマネの園に導いてきた。
- ⑩彼は、口づけでイエスを売り渡した。

(2) イエスの愛に注目すべきである。

- ①イエスは、決して裏切り者がユダであることを明かさなかった。
- ②最後の晚餐では、ユダはイエスの左の席にいた(2番目の席)。
- ③イエスは、ユダにしか分からないように、パンを与えた。
- ④イエスは、最後までユダに悔い改めの機会を与え続けた。
- ⑤ユダは、後悔はしたが、悔い改めはしなかった。
 - *彼は、自らの罪責感を処理しようとした。
 - *しかし、イエスとの関係を修復しようとはしなかった。
- ⑥主イエスを信頼するなら、赦されない罪はない。